

ソニックシティ 2026シリーズ　第 158回さいたま定期演奏会
2026年 11月7日（土）午後2時開演／ソニックシティ　大ホール

日本フィルハーモニー交響楽団　第158回さいたま定期演奏会

ドヴォルジャーク
チェロ協奏曲 ロ短調 op.104（約43分）
Antonín DVOŘÁK:Concerto for Violoncello and Orchestra in B-minor, op.104

～休憩(20分) ～

チャイコフスキー
交響曲第5番 ホ短調 op.64（約47分）
Pyotr TCHAIKOVSKY:Symphony No.5 in E-minor, op.64

指揮：**広上 淳一**［フレンド・オブ・JPO（芸術顧問）］
Conductor: HIROKAMI Junichi, Friend of the JPO/Artistic Advisor

チェロ：**宮田 大**
Violoncello: MIYATA Dai

コンサートマスター：**扇谷 泰朋**［日本フィル・ソロ・コンサートマスター］
Concertmaster: OGITANI Yasutomo, JPO Solo Concertmaster

管弦楽：**日本フィルハーモニー交響楽団**
Orchestra: Japan Philharmonic Orchestra (JPO)

主催
公益財団法人埼玉県産業文化センター / さいたま市 / 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援
埼玉県 / 埼玉県教育委員会 / さいたま市教育委員会 / 埼玉県吹奏楽連盟

協賛
武蔵野銀行

表紙作品提供
埼玉県立新座総合技術高等学校デザイン専攻科　真山晶幹
作品名「万感」
作者コメント「万感は、様々な思いが込められているという意味です。
骨にまで音が伝わる感覚をイメージしました。」

【アンケートのお願い】今後のソニックシティ主催公演参考のため、アンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにお答えいただきました方から抽選で3名様に本日の出演者広上淳一氏と宮田大氏のサイン色紙をお送りいたします。右の二次元コードより、スマートフォン・タブレットからお答えください。(所要時間約5分)

▶本公演は最終楽曲が終了し、指揮棒が下りて以降は写真撮影が可能です（アンコールは除く）。撮影はスマートフォン・携帯電話をご使用いただき、自席にてご着席のままお願い致します。撮影時は周りのお客様へご配慮いただきますようお願い致します。



©Masaaki Tomitori

指揮：広上 淳一

東京生まれ。尾高惇忠にピアノと作曲を師事、音楽、音楽をすることを学ぶ。東京音楽大学指揮科卒業。1984年、26歳で「第１回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」に優勝。以来、フランス国立管、ベルリン放送響、コンセルトヘボウ管、モントリオール響、イスラエル・フィル、ロンドン響、ウィーン響などメジャー・オーケストラへの客演を展開。これまでノールショピング響、リンブルク響、ロイヤル・リヴァプール・フィルのポストを歴任、このうちノールショピング響とは94年に来日公演を実現、さらに米国ではコロンバス響音楽監督を務めヨーヨー・マ、五嶋みどりをはじめ素晴らしいソリストたちとともに数々の名演を残した。

2008年４月より京都市交響楽団常任指揮者を経て2014年４月より常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザー、常任指揮者として13シーズン目の2020年４月より2022年３月まで京都市交響楽団第13代常任指揮者兼芸術顧問を務めた。2015年には同団とともにサントリー音楽賞を受賞。現在はオーケストラ・アンサンブル金沢アーティスティック・リーダー、日本フィルハーモニー交響楽団 フレンド・オブ・JPO（芸術顧問）、札幌交響楽団友情指揮者、京都市交響楽団 広上淳一。2025年よりマレーシア・フィルハーモニー管弦楽団音楽監督に就任。また、東京音楽大学指揮科教授として教育活動にも情熱を注いでいる。

2024年第75回芸術選奨文部科学大臣賞受賞。



チェロ：宮田 大

2009年ロストロポーヴィチ国際チェロコンクールにおいて、日本人として初めて優勝。これまでに参加した全てのコンクールで優勝を果たしている。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの支持が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛され、日本を代表するチェリストとして国際的な活動を繰り広げている。

スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。

録音活動も活発で、トーマス・ダウスゴー指揮、BBCスコティッシュ交響楽団との共演による「エルガー：チェロ協奏曲」をリリース。欧米盤が、欧州のクラシック界における権威のある賞の一つ「OPUS KLASSIK 2021」において、コンチェルト部門（チェロ）で受賞するなど、海外からの評価も高まっている。

最新アルバムは､ギタリスト大萩康司とのデュオ第二弾となる『atelier』を2024年12月にリリース。

マスメディアでも「題名のない音楽会」「徹子の部屋」「クラシックTV」などへ出演している。

近年は国際コンクールでの審査員や、ロームミュージックセミナーの講師を務めるなど、若手の育成にも力を入れている。

使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製A. ストラディヴァリウス“Cholmondeley”である。

愁 ～故郷への哀愁　開かれる愁眉～

ドヴォルジャーク　チェロ協奏曲 ロ短調 op.104

現在でこそ「チェコの音楽家」と言われているドヴォルジャーク（1841-1904）。だが「チェコ」とは当時、チェコ語が話されている地域という意味合いであり、その中心地はチェコの西部に位置するボヘミアだった。しかも複雑なことに、当時のボヘミアは、オーストリアを本拠地とするドイツ系貴族のハプスブルク家に支配されていた。

ドヴォルジャーク自身、ボヘミアで生まれ育ち、その中心都市であるプラハを本拠地として音楽的な経験を積んでゆく。しかもプラハにはハプスブルク家の支配もあって、ドイツの文化とチェコの文化が絶妙な形で共存しており、彼自身その影響を大きく受けていた。ただし当時のボヘミアでは、チェコ語を第一言語とする人々＝チェコ人による民族独立を果たそうとする動きも強まっており、それがドイツ系住民との軋轢も生みつつあった。

こうした状況の下、ドヴォルジャーク自身、オーストリア…特にその都のウィーン…と密接なつながりを持つ一方で、時に「オーストリアに歯向かうチェコ人」と白眼視される出来事も経験する。そんな最中の1892年、ドヴォルジャークは渡米した。まだ新興国だったアメリカはニューヨークの音楽院院長職を打診され、迷った挙句にそれを引き受けたのだった。

そのアメリカ滞在中の1894年から95年にかけて書かれたのが、『チェロ協奏曲』。当時のドヴォルジャークは重度のホームシックにかかっており、ついにはボヘミアへ最終的に引き上げるほどの事態になった。さらに義理の姉…ドヴォルジャークは若き日に、彼女に想いを寄せていたこともある…が重篤に陥り、彼の帰国直後に亡くなってしまうという出来事も重なる。

このように考えると、よく分かるだろう。第１楽章の第２主題のメロディが、なぜそこまでやるせないのか。安らぎに満ちているはずの第２楽章の中間部に、なぜ突然ほの暗いテーマが現れるのか。（なおこのテーマは、義理の姉のために若き日のドヴォルジャークが書いた歌曲『一人にさせて』に基づいている。）果せるかな、義姉の死後、ドヴォルジャークは第３楽章の最終部分を大幅に拡大した。そして第１楽章が回想され、続いて件の歌曲のメロディが再び現れるような改訂をおこなった。

チャイコフスキー　交響曲第5番 ホ短調 op.64

苛烈な闘いを経て輝かしい勝利へ至る道のりを圧倒的な響きで示し、「運命」という呼び名で有名な、ベートーヴェン（1770-1827）の『交響曲第５番』。以前であれば、演奏会の景気付けのような存在だった交響曲のあり方を、根底から覆した典型的な作品である。さらに彼に続く作曲家の多くも、そうした交響曲を書くことこそ、自らの使命だと考えるようになる。

ロシアのチャイコフスキー（1840-93）もその１人だった。特に『交響曲第５番』は、まさにベートーヴェンの「運命」の衣鉢を継ぐかのように、闇から光への道のりが、50分ほどの演奏時間の中で示されてゆく。

ただし、一言で「闇から光へ」と言っても、その内容はベートーヴェンのそれとは随分と異なる。チャイコフスキーの場合は、運命と闘いというよりかは、運命に打ちひしがれるような楽想…これが全曲を繋ぐ主題となる…で第１楽章が始まった後、第２楽章の憂いに満ちた憧れや、第３楽章の夢幻的なワルツを経て、第４楽章でも闇と光が目まぐるしく切り結んだ後、ようやく最後の最後で輝かしい凱歌が奏でられるという次第。

チャイコフスキー自身、元々憂鬱な性格の持ち主であったところに加え、当時のロシアでは犯罪と見なされていた同性愛の傾向を持っていることに密かに悩み続けた。またそうした背景からか、シェイクスピア（1564-1616）の『ハムレット』における主人公の苦悩に強い共感を覚えたり、さらには親しい友人が異郷で病を得て死去する様を目の当たりにしたりした体験が、深い懊悩に溢れた楽想に貫かれた交響曲を書かせたのだろう。折しも当作品が誕生したのは1880年。「闘えば勝つ」という19世紀的な価値観が、いよいよ最後の光芒を放ち始めていた。

曲目解説：小宮正安

ダンスと音楽

ソニックシティでは2027年2月に「SONIC DANCE FESTIVAL」を開催します。この催しを踏まえ、2026年の日本フィルさいたま定期演奏会シリーズでは、「ダンスと音楽」をテーマにコラムをお届けします。

「国民楽派」とダンス



祭りの夕べの踊り、19世紀初頭、作者不詳

音楽の教科書などで知られている「国民楽派」という言葉、どうも現在では日本特有のものらしい。その上で、「国民楽派」の一応の定義を書けば、いわゆる「西洋クラシック音楽の本場」と見なされていたイタリア、フランス、ドイツ「以外の」地域で見られた、音楽的な傾向、といえる。

具体的には自国の民謡や民族音楽を積極的に取り入れ、それが場合によってはその地域に根付いた人々のプライドを呼び覚まして民族独立運動を後押しするきっかけを作ったり、あるいは民族独立運動の中からこうした傾向の音楽が生み出されたりした。つまり本日取り上げられる、ボヘミア出身のドヴォルジャークやロシアのチャイコフスキーがその典型的存在ということになる。

たしかに、例えばドヴォルジャークの『チェロ協奏曲』の第３楽章のリズムについては、ボヘミアの民族舞踊からの影響が指摘されている。そうでなくてもドヴォルジャーク自身、ボヘミアの民族舞踊を彷彿させる『スラヴ舞曲集』を発表することで、作曲家として一躍頭角を現したほど。チャイコフスキーの場合も、それこそバレエ音楽の『白鳥の湖』や『くるみ割り人形』に、ロシアの民族色満載の舞曲を書き込んでいる。

だが、そのチャイコフスキーによる『交響曲第５番』の第３楽章は、「西洋クラシック音楽の本場」で19世紀に流行したワルツを基としている。そうでなくてもチャイコフスキーは、ロシア伝来の音楽に西洋の中心で培われた音楽を接ぎ木することを積極的に展開した。またドヴォルジャークも、アメリカへ渡ってからは、現地の民族音楽を積極的に学び、それを自身の作品へ採り入れた。その好例が、ボヘミアの民族舞踊のリズムと、黒人霊歌風のメロディが融合した、『チェロ協奏曲』の第３楽章だった。

ちなみに、ドヴォルジャークやチャイコフスキーが生きた19世紀は、王侯貴族の支配の下から市民が立ち上がり、自らの「個」を前面に押し出して社会的台頭を遂げていった時代である。そうした時代を背景に、彼らは自らのルーツを形成する民族色を押し出しながらも、自身にしかできない体験や哲学を反映させた個性的な音楽を創り上げていった。それこそが「国民楽派」の真髄、さらにはそこに花開いた「ダンス音楽」の魅力なのではないか。

文章：小宮正安

第158回さいたま定期演奏会に寄せて

この度は第158回さいたま定期演奏会の開催を心よりお慶び申し上げます。

今回、ステージ左側には樹齢約70年の深山海棠（ミヤマカイドウ）の盆栽をご用意いたしました。深山海棠はまたの名をズミといい、日本各地の山野に自生するバラ科リンゴ属の落葉樹でございます。

一般的に深山海棠は小さな赤い実が特徴ですが、本作では黄実ズミとも呼ばれる黄色い実が着く稀な個体で仕立てられております。また、本作は半懸崖という樹形で仕立てられており、大きく右下へ伸びる枝が風の流れを感じさせます。黄色い実と青い鉢のコントラストからも実物盆栽ならではの瑞々しさを感じていただけると幸いでございます。

右側には、樹齢約150年の蝦夷松（エゾマツ）の盆栽をご用意いたしました。蝦夷松は北海道を中心に寒冷な地域に自生する針葉樹で、北国を代表する樹木のひとつでございます。蝦夷松特有の荒れた樹皮と黒味がかった幹肌からは風格と気品を感じられます。

本作は幹が左側へ流れて立ち上がる斜幹という樹形に仕立てております。大きく下へ垂れ下がる枝や密にまとまった葉が力強く立ち上がる幹と調和し、自然の雄大さと静寂を感じさせます。

オーケストラの演奏と、盆栽の景色の調和をお楽しみいただけましたら幸甚に存じます。

盆栽清香園　山田寅幸





JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA

日本フィルハーモニー交響楽団

New Year Concert 2027

世界が日覚める、

希望の夜明け

〈指揮〉
カーチュン・ウォン
［首席指揮者］
Conductor: Kahchun WONG, Chief Conductor
© Ayane Sato

〈トランペット〉
児玉隼人
Trumpet: KODAMA Hayato
© Yuji Ueno

ハチャトゥリアン:
組曲《仮面舞踏会》

ハイドン:
トランペット協奏曲 変ホ長調
Hob.VIIe:1

J.シュトラウスⅡ世:
喜歌劇《こうもり》序曲

J.シュトラウスⅡ世:
ワルツ《美しく青きドナウ》op.314

ラヴェル:
《ダフニスとクロエ》第2組曲

Aram KHACHATURIAN: Suite "Masquerade"
Franz Joseph HAYDN: Concerto for Trumpet and Orchestra in E-Flat major, Hob.VIIe:1
Johann STRAUSSII: "Die Fledermaus" Overture
Johann STRAUSSII: Waltz "An der schönen blauen Donau" op.314
Maurice RAVEL: "Daphnis et Chloé" suite No.2

第267回芸劇シリーズ *Geigeki Series*

2027年1月10日(日) 14:00開演
［13:00開場］

東京芸術劇場コンサートホール
Tokyo Metropolitan Theatre

14:00, Sunday, 10th January, 2027, at Tokyo Metropolitan Theatre

料 金（税込）

2026年9月16日(水) 発売

S席 8,500円 / A席 7,000円 / B席 6,000円 / C席 5,000円 / D席 3,500円 / Ys席（25歳以下） 2,500円 / Gs席（70歳以上） 5,000円

＊Ys席・Gs席は日本フィルでのみ扱います。S席以外から選べます。＊未就学児の入場はご遠慮ください。＊出演者、曲目等は変更される場合がございます。あらかじめご了承ください。＊障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターまでお問い合わせください。＊車いすでご来場予定のお客様は、当日のスムースなご案内のため、チケットご購入後ご購入席番を日本フィル・サービスセンターまでご連絡ください。

主催：公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団
協賛：ホッカンホールディングス株式会社

お申込み お問合せ
日本フィル・サービスセンター TEL:03-5378-5911［平日10:00～17:00］
eチケット♪ 席を選んでお申込みできます **https://eticket.japanphil.or.jp**

JAPAN PHILHARMONIC ORCHESTRA
── 創立指揮者 渡邉暁雄 ──

チケットぴあ https://w.pia.jp/t/japanphil/
e+【イープラス】https://eplus.jp/
ローソンチケット https://l-tike.com Lコード:32251

東京芸術劇場ボックスオフィス https://www.geigeki.jp/ticket/
（託児サービス）
株式会社明日香 電話 0120-165-115（平日9:00～17:00）
ご予約またはお問合せの際「東京芸術劇場の託児予約の件で」とお伝えください。

More For You
もっと、街・暮らし・笑顔のために

多彩な価値を結集し、
地域No.1のソリューションで埼玉の未来を切り拓く



武蔵野銀行